

岩手県水産技術センターニュース
シーガルボイス
SEAGULL - VOICE

No.4 1995年7月

新しい漁業調査指導船『北上丸』が完成



水産技術センターの新しい漁業指導調査船「北上丸」が完成し、4月11日、工藤巖知事をはじめ、関係者約100人が出席して竣工式が行われました。

「北上丸」は老朽化した五代目北上丸の代船として建造され、総トン数59トン、650馬力のエンジンを搭載し、スキャニングソナー、自航式水中TVロボット、多層式超音波流速計など最新のハイテク機器を備えています。

主に沿岸域の漁業資源調査及び海洋観測調査を行います。

目次

- [ズームアップ](#) [漁業資源部](#)
- [特集1](#) [新『北上丸』の紹介](#)
- [特集2](#) [「北山崎無線局」開局](#)
- [底生生物調査結果（漁場保全部）](#)
- [ペルーからの海外技術研修員 若尾デアリアさん紹介](#)
- [トピックス](#) [北山崎無線局 早くも威力](#)

[県中南部のホタテガイ採苗数が極少](#)

[トリガイの採卵開始](#)

[人工魚礁における標識放流調査](#)

[さくらます幼魚の標識放流](#)

[お知らせ](#)

[家庭で作ることができる水産加工品 第3回「塩ウニ」](#)

[編集後記](#)

ズームアップ 漁業資源部

漁業資源部では、主に漁海況情報の高度利用技術開発や人工魚礁漁場の有効利用開発研究及び資源管理型漁業の推進等に関する調査研究に取り組んでいます。

漁業資源部の主な研究テーマ

漁海況情報の高度利用技術開発

本県沖合の海況と漁場形成の関連を究明し、迅速・的確な予報を行うための、漁況予測手法の開発を行っています。また、これらの情報を有効に利活用し、漁業者のみなさんが水産技術センターのファックスにアクセスして、リアルタイムに情報を入手できるよう水産情報システムを構築し、各種情報提供のためのサービス事業を行っています。

人工魚礁漁場の有効利用開発研究



北上丸による人工魚礁調査

人工魚礁の集魚機構を解明し、魚礁漁場の有効範囲と魚類の生息密度や現存量を推定するため、岩手丸及び北上丸による調査を沿岸各地で実施しています。また、人工魚礁における資源培養機能を解明するため、並型魚礁を対象として民間漁船による漁獲試験や水中テレビによる観察調査で、魚類の季節的移動や魚礁周辺の行動等の生態研究を行っています。

資源管理型漁業の推進

資源管理型漁業は、沿岸・沖合漁業の振興を図るために、国・県においても施策の重点事項になっています。本県においては、資源管理型漁業は緒につい



底びき網で漁獲されたスケトウダラの魚体測定

たばかりで、今後一層積極的に取り組む必要があります。最近では漁業者自身も重要性を認識し、自主的に資源管理を促進する機運が高まりつつあります。沿岸重要資源の永続的有効利用を促進させるため、今後さらに漁業者間の調整を図りつつ、これまでの調査研究をますます発展させていきます。

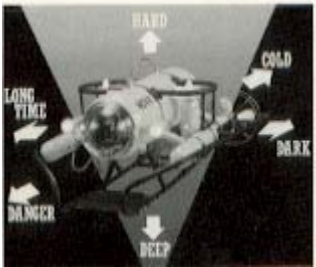
秋さけ資源適正利用配分の推進

沿岸に回帰した秋サケに標識を装着して放流し、これらの回遊の経路や時期及び量等を把握し、産卵回遊期における生態の特性を解明するとともに、秋サケ資源をめぐる漁業調整及びその利用配分を適正化するための調査研究を精力的に実施しています。

[\[目次に戻る\]](#)

特集1 新「北上丸」を紹介しす

新しい漁業指導調査船「北上丸」は漁業指導を目的とした海洋環境、資源管理及び漁場形成等の各種調査・研究が行える、多目的かつ多機能なハイテク技術を駆使して建造され、この度就航しました。本船は、佐々良雄船長をはじめ、9名が乗り組み、連日、奮闘しています。

水中テレビカメラ装置	スキャニングソナー	超音波流向流速計（航跡記録式潮流観測装置）
 <p>水深230mまで潜水観測可能な自航式水中ロボットで、ビデオカメラの他、スチールカメラやソナーを装備。このテレビロボットは魚類の分布調査や生態研究及び分布量の定量化が可能。</p>	<p>全周型のタイプで、周囲に分布する魚群を一目瞭然に確認できるとともに、魚群の追尾を容易にできる。さらに魚群量を相対的に数値化できる装置</p>	<p>水面下400mまでの3層の潮流を航走しながら計測できる。海岸線や本船の航跡、潮流、3層の流向流速表示、表面水温を併せて表示することが可能。この観測データにより、魚群の移動方向や漁具の効果的な敷設方向等が容易に把握できる。</p>

[\[目次に戻る\]](#)

特集2 「北山崎無線局」開局 ～ 沿岸全域をカバー



小型漁船漁業の振興と安全操業という観点から、県北海域においても県南海域同様、24時間体制できめ細かな情報提供ができるよう、県は田野畑村北山の七ツ森（標高429m）山頂付近に、漁業指導用無線局を新設しました。

この「北山無線局」の開局で、宮古以北の海域においても、24時間、漁海況情報や安全情報を受信できるようになりました。

定時通信	随時通信
<通信時間> 04:15～04:30、05:15～05:30、08:15～08:30、11:15～11:30、14:45～15:00、17:00～17:30、20:00～20:15、23:30～24:00	海上警報、霧、地震、津波等の情報 を入手次第放送
<放送内容> 海上気象予報、各湾水温情報、市況、漁海況、指導船調査情報、周知事項等	

なお、放送にかかる詳細は釜石無線局まで連絡ください。

(TEL 0193-22-4180 FAX 0193-22-2621)

[\[目次に戻る\]](#)

底生生物調査結果（中間報告）（漁場保全部）

平成7年5がつ22日山田町漁村センター、23日大船渡市（社）岩手県栽培漁業協会において、北海道大学水産学部中尾繁教授を招いて、平成3年度から5年度に行われた県内6湾における底生生物調査の中間報告会が行われました。

底生生物とは一体どのようなものなのでしょうか？

海の生物は海中を自由に泳ぎ廻る**ネクトン**や**プランクトン**そして海底に生息している底生生物（**ベントス**）の三つに分類されます。

底生生物は甲殻類（ヨコエビ等）、二枚貝、多毛類（ゴカイ類）を指し、長期間同じ場所に生息しています。そのため、その場所の環境がよく反映されることとなります。

これまでの海底の環境状況を調査するための方法は理化学検査によるものでした。理化学検査では採取した時とその周辺のごく狭い範囲のことしか分からないのではないかと反省から、底生生物を利用する調査を取り入れることになりました。

そして、今回の調査結果から3種類の組み合わせにより、きれいな環境から汚れた環境までの5段階（A、B、C、D、E）に区分されることが分かってきました。この分類方法は湾内の形状にもよりますが、深度が大きくなるに従い汚れた環境となっており、この面の解析も進めているところです。

甲殻類、二枚貝、多毛類の組み合わせによるAからEの区分は図1のようになります。また、大槌湾と広田湾の調査結果は図2のとおりです。

県内の河川の水生生物による水質調査（ヒラタカゲロウ類のきれいな環境A、イトミミズやヒルの汚れた環境E）が小・中学生を中心として、調査箇所数、参加人数とも全国一の規模で行われています。そして、県環境公害課から調査結果のマップが発行されています。

海底の調査には難しいものがありますが、海辺での同様な調査方法が確立されて、河川と同じ様な調査が行われるようになれば、漁業関係者だけでなく、一般の人たちにも海の環境に対する認識が高まるものと思われまます。

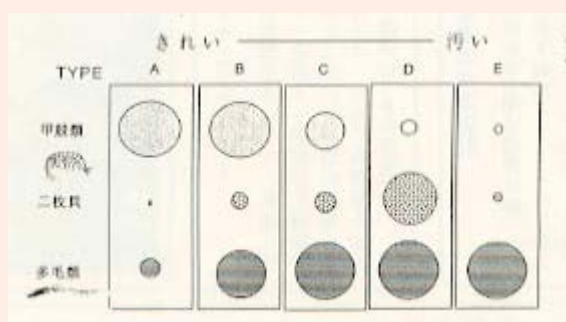


図1



図2

[\[目次に戻る\]](#)

海外技術研修員 - 若尾デリアさん紹介

ペルーから日系3世の若尾デリアさんが、水産加工技術の研修のため、5月下旬に来所しました。来年9月下旬までの1年4カ月間、当所利用加工部に所属し、練り製品などの水産加工品の製造技術を中心に研修する予定です。若尾さんはリマ市の出身で、両親とも日本人です。

これまで、自宅では主として日本語、外ではスペイン語と使い分けて生活してきたため、大体の日本語は理解でき、また、話すことができます。趣味・特技は料理・手芸・バレーボールとのことです。

ペルーは我が国とは太平洋を隔てた遠い国ですが、古くは「移住」を通じて、また、近年はその恵まれた「漁業資源」を通じて関わりの強い国の一つです。

ここで育った若尾さんは、「この恵まれた漁業資源を有効に利用し、母国の発展に貢献したい」と国立

ラ・モリナ大学で水産加工を専攻し、更に今回、より進んだ技術を身につけようと来日したもので、「**研修で得た技術をもとにして、ペルーの人々に、水産物をおいしく、たくさん食べてもらえるようにしたい**」と張り切っています。なお、研修中には、加工技術の他にホタテガイやワカメの養殖、漁船漁業などについて知見を広める予定です。

[\[目次に戻る\]](#)

トピックス

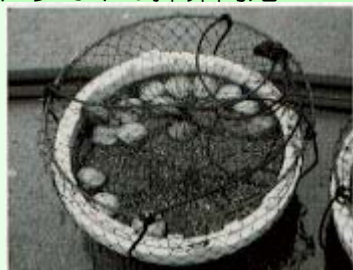
北山崎無線局早くも威力 ～ 種子島のSOS傍受

SOS信号を受信したのは5月28日午前10時20分ごろ。種子島沖では熊本県のはえ縄漁船が網をプロペラに絡ませ操航不能となり、救助を求めてきました。北山崎無線局で緊急信号を受信すると、自動的に釜石無線局につながるシステムになっており、同無線局から連絡を受けた釜石海上保安部が本部を通じて鹿児島県海保に連絡しました。この漁船は約6時間後、海保から協力要請を受けた種子島の漁船に曳航されて無事同島の漁港に入港しました。

県中南部のホタテガイ採苗数が極少

山田湾のホタテガイ生殖腺調査の結果からみると、今年の産卵時期は例年より遅れ、5月以降となっています。5月から6月下旬の釜石湾の1週間当たりの付着稚貝数は、1袋当たり14～160と昨年よりも非常に少なくなっています。 **(増養殖部)**

トリガイの採卵開始



トリガイの採卵を6月から開始しました。トリガイは、岩手県ではあまり馴染みのない貝ですが、“寿司たね”にもされる高価な二枚貝です。種苗開発部では、このトリガイの種苗生産技術が最も進んでいる京都府立海洋センターの飼

養殖用の容器に分散したトリガイの採卵技術を導入するなど、種苗の量産技術開発に取り組んでいます。

イ

人工魚礁における標識放流調査

漁業資源部では人工魚礁に分布する底魚類の行動パターンを明らかにすることを目的とし、底延縄を利用した標識放流を6月5日から7日に大釜崎、御箱崎人工魚礁周辺にて実施しました。標識が付いた魚が獲れた際には漁業資源部までご連絡ください。

さくらます幼魚の標識放流

さくらます研究室では、平成7年度春に安家川、閉伊川及び摂待川にサキラムスの幼魚（ヒカリ）を放流しました。標識は脂鰭、右腹鰭または右胸鰭を切除し、一部には併せてイワテと印字したリボンタグを背鰭の付け根に装着しています。標識されたヒカリまたはサクラマス幼魚を採捕された際には、**日時、場所、採捕者、漁法、サイズ**について、さくらます研究室までご連絡ください。

[\[目次に戻る\]](#)

お知らせ

★**4月28日、「アカイカ釣漁業勉強会」**開催。当センターの大会議室において、中型いか釣漁業関係者約20名が参加し、北水研の村田守資源管理部長を招いて、「アカイカの生態と漁場形成」について勉強しました。（漁業資源部）

★**6月6日、「マツカワ養殖検討会」**開催。当センター大会議室において、関係者約50名が参加し、平成7年度計画、魚病対策等について協議しました。（企画指導部）

☆**7月14日、「漁海況予報説明会」**開催。当センターにおいて、今後の海況・漁況の見通しについて説明します。（漁業資源部）

☆**7月21日、「第2回底曳網シンポジウム」**開催。当センターにて底曳網漁業者を対象に行います。（漁業資源部）

☆**8月8日～10日、「日本生物教育学会全国大会（研修会）」**開催。当センターにて会員60名が参加し、講義や実習が行われます。

[\[目次に戻る\]](#)

家庭で作ることができる水産加工品～第3回『塩ウニ』

「ふり塩法」と「たて塩法」がありますが、さらに、アルコールを使う方法もあります。どの方法でも味をなじませるために、作った後、数日から1週間程度冷蔵庫で熟成させてから食べます。

1. ふり塩法の例

むき身	
↓	
散塩漬	ざるにガーゼ等を敷いて、この上にむき身を薄く並べ、むき身に対して10%程度の精製塩を振り、軽く混ぜる。
↓	
脱水	ざるごとポリ袋に入れ、冷蔵庫に一晩置く。
↓	
塩ウニ	粒を崩さないようにして容器に詰める。

2. たて塩法の例

むき身	
↓	
塩水漬	むき身と同量の15%食塩水に30分間漬け込む。この間、数回、緩やかに攪拌する。なお、15%食塩水は水100ccに食塩15gを入れ、沸騰させた後、冷やして使う。
↓	
水きり	ざるに取り、冷蔵庫に1時間程度置く。
↓	
塩ウニ	粒を崩さないようにして容器に詰める。

[\[目次に戻る\]](#)

編集後記

開所から1年余、ユニークな造りと“マツカワ”の魅力に惹かれてか、視察・見学者は今もひっきりなし。一般の方も結構多いが、気になるのは漁業関係者の足。開かれた試験研究機関とは頼りになる組織のことだと思えます。ニーズを的確につかみ、研究して得られたことは分かりやすい言葉とふれあいで即現場に返すという研究姿勢、相談に来た方々がまた来たくなるような指導力と対応、が職員一人ひとりに望まれます。真に頼りになる水産技術センターを目指し、工藤巖知事の口ぐせであったホウ・レン・ソウ（報告・連絡・相談）の徹底を心がけ、組織運営に当たりたいと思えます。本号発行を契機に設置された広報誌編集委員会委員長として、所感の一端を述べ、編集後記に代えます。〔副所長 上村俊一〕

[\[目次に戻る\]](#)